

「地シ女（じしじよ）」

人  
物

石井純（26）特別対策室

古江響子（32）特別対策室長

三好省吾（42）特別対策室

男

## 概要

徳島県防災対策特別室に勤務する石井純は新任の室長を待ち受ける。そこにおとずれたのは、地震の揺れが大好きな地震オタクの通称「地シ女」の古江響子。最初は彼女の行動や言動に戸惑いながらも、防災に対しての考えや信念に打たれ、考え方が変わっていく。

SE ハイヒールの甲高い足音。

石井M「あー、ヤバい！ どうしよう…：…もうこんな時に、三好さんは出張だし、なんでも今度くる室長は京大の地震研究所にいて超変人らしいし…：…」

SE ハイヒールの足音が大きくなる。

石井M「あー来る…：…」

SE ドアの開く音。

響子「何してんの？」

石井M「そこには色白で尖った眼鏡の女性が立っていた。そして手には…：…」

SE 魚の跳ねる音、

石井「えっ…。なんですかそれは？」

響子「なままずよ」

石井「なっ、なままず！ なんぞ？」

響子「地震の予知にはつきものでしょ。ここが対策室？」

石井「えっ、そうです。あっ、石井です。石井純です。係長の三好は、出張中です」

響子「そう。今日から、ここの室長をするこ

とになった古江響子。よろしく」

石井M「どういう事だ、予想とはまるで違って、変人だけど美人じゃないか」

響子「何？」

石井「いえ、コーヒーいれましょうか？」

響子「いや、いらない」

SE 椅子に座る音。

響子「石井」

石井M「いきなり呼び捨てかよ」

響子「石井、この資料、目通しといて」

石井「はっ、はい」

響子「石井、それ次の会議で発表するからね」

石井「えっ、まさか、僕が発表を？」

響子「ええ、石井がやるの」

石井「わ、わかりました……」

SE キーボードを叩く音。

石井M「まあ、僕を頼りにしてるのかな、ふ

むふむ。えっー」

響子「どうかした？」

石井「こんなの無理ですよ！避難訓練なんか、

このコロナ禍で人を一箇所に集めるとかは」

響子「マスク着用。消毒液と遮蔽版の設置すればいいでしょ」

石井「あと復興後のために、高台にある地域に避難施設を作るとか……」

響子「なんで？」

石井「いや、予算とか、コロナ禍で県の予算もいっぱいいっぱい……」

響子「改めて申請すればいいじゃない」

石井「そういう問題じゃないですよ。休業補償とか、県民も飲食店の経営者とかも大変なんですよ」

響子「人の命とどっちが大事なの？」

石井「もちろん、人命ですけど……」

響子「じゃあ、やって」

石井M「なんなんだ、あーイライラしてくる」

SE 振動（貧乏揺すり）

響子「石井、貧乏ゆすり！」

石井「あっ、すみません」

響子「石井、揺らすなら、もっと激しく！」

石井「えっ！」

響子「私は地震の揺れが大好きなの。あの激しい振動がたまらないの」

石井M「ヤバ―、本当にヤバいかも」

SE 携帯の着信音。

響子「もしもし古江です。観測所の計測はどう？ええわかった。上那賀と塩江は？うん。うん……」

石井M「本当はすごいひとなのか？」

SE 携帯の着信音。

石井M「三好さんからだ」

SE 扉を開ける音。足音。

石井「（小声で）もしもし、三好係長。早く帰ってきてくださいよ。ヤバいですよ。新しい室長……ええ……」

SE 扉の閉まる音。

石井M「僕は、今までのやり取りを係長に伝えた」

三好「（電話の声）それは、変わってるなあ。でも、方向性は間違っていないんじゃない。

俺も、いろいろな地区を回っていて実感したよ」

石井「えっ、そんな……」

三好「（電話の声）それに、会議で発表するなら見せ場じゃないか。よく聞いて頑張れよ！」

石井「えっ、三好係長。三好……」

SE 電話の切れる音。

石井M「なんてことだ、僕はどうすれば……」

響子「石井——っ」

石井「はっ、はい」

SE 足音。

響子「石井は阪神大震災のこと覚えてる？」

石井「いえ、僕は生まれたばかりの頃だから」

響子「私は小学生だった。（興奮して）激しい振動で目を覚ましたわ。あの振動がたまらなかった。この徳島でも長い時間揺れたわ。あれから、地震の揺れの虜になっていった」

石井M「なんだなんだ？」



響子「夜があけると、テレビで神戸の街が大変なことになってた。あんな光景を見たのは初めてだった」

石井「そうみたいです」

響子「それから、地震の研究に没頭していったわ。あー（興奮気味に）」

石井「ちよっと不謹慎では？」

響子「なんで？」

石井「地震で多くの人々が亡くなったりしているのに」

響子「はあ。地震を正当化している訳じゃない。地震の揺れは好きだが、地震は好きじゃない。地震や津波は人を不幸にする！大切なのは、人の命よ！」

石井M「なんだよ、この人……」

響子「阪神のときも地震被害はあった。でも津波は来なかった。でも、今度は……」

石井M「彼女は真剣な表情に変わった……」

響子「私は、地震の研究に研究を重ね、地震の予知を88.8%まで上げてきたわ」

石井「88.8！」

響子「東日本震災の時は6割程度だったけど」

石井「6割？まさか、東日本震災を予知して

いたんですか？」

響子「一年程、ズレがあっただけ」

石井「一年……」

響子「間に合わなかった……」

石井M「なんかこの人、すごい人？」

SE 窓を開ける音。

石井「でも、一年のズレだけはすごいです」

響子「あの震災では、多くの人が亡くなった。

揺れだけじゃなく、津波があった。もう少し

し準備ができていれば、助かった命はもっ

と多かったのに……」

石井M「彼女は、悲し気な目をして遠くをみていた」

響子「南海トラフ地震が来れば、ここは必ず

被害に遭う。地震を防ぐことはできないけ

ど、地震の被害を防ぐことは可能なの」

石井「被害を防ぐこと……？」

響子「この徳島、いや四国全般的に山岳部が非常に多い。だから、高台にシェルターを作れば、津波が発生した時に津波被害を防ぐことができる！」

石井「シェルター……。避難所じゃなく」

響子「石井、地響きを聞いたことある？」

石井「地響き……。？」

SE ごおおーとなる地響き音。

響子「私はあるわ。海底の地質調査のためにダイビングをしている時、船が入港するよ  
うな『ごおおー』と響く音。たまらなかつた」

石井M「なんてすごい体験なんだ」

響子「過去の地震箇所、日時、規模、天候等から研究した結果、必ず数年以内に南海トラフは来る！」

石井M「僕は、彼女の言葉にぐうの音もでなかつた。彼女はまさしく地シ女だ」

響子「個々の地震に対する事前の準備は勿論だけど、行政もやれることはやっておく必

要がある。高台の地盤調査、避難所及びシ  
ェルターの建設、利用方法。迅速な避難経  
路。県民への告知、あらゆる事すべてよ」

石井「すっ、すごい！」

響子「復興には時間がかかる。その間の住民  
のストレスは大変なことよ。だから、これ  
からは事前復興も大切なの」

石井「正確な予測はできているのですか？」

響子「さつき確認した観測所のデータと私の  
独自の計算方法では、100日以内！」

石井「えー、100日！本当ですが？」

響子「嘘よ」

石井「嘘……」

響子「自然の猛威を人間ごときが把握できる  
わけないでしょ。だから、予測にとらわれ  
ず、常に地震に関心を持っていることが重  
要なのよ」

石井M「彼女が輝いてみえた」

SE 会議室の雑音。

石井「今、お話ししたとおり、南海トラフ地

震に備えて、事前の防災訓練および復興準備が必要だと思えます。是非、訓練の実施やシェルターの建設も検討お願いします。研究者の計算では、100日以内に発生の予測がでています」

S E ざわめく声

男「100日以内は、本当か？」

石井「嘘です」

S E ざわめく声

石井「予測にとらわれず、常に地震に関心をもつことが私たちに重要なんです」

S E 拍手の音。

石井M「隅で聞いていた、地シ女の口元がゆるんでいた。僕は、誇らしく思った」

(了)